

日本が世界に誇る地理学者

JR常磐線高萩駅は、東口に改札口がない。改札口は山側の西口である。乗降客が行き交う西口ロータリーに一基の銅像がある。なんと広場に背を向け、書見台を前に袴姿で正座している。

銅像の主は、日本が世界に誇る地理学者、長久保赤水の侍講姿である。経緯線を記入した日本で最初の日本地図『改正日本輿地路程全図』を誕生させた人物だ。輿地とは大地や地球を指す。

銅像は、駅を背にして山側の街並みを向いてもいいところだが、東向きである。その先には太平洋が広がっている。

赤水は、国内はもとより中国の地図や世界地図も制作している。太平洋から世界に目を向けた赤水の思いを受け止めると、太平洋に向けた東向きがふさわしい。

赤水は享保2年(1717)、常陸国多賀郡赤浜村(現茨城県高萩市)の農家に生まれた。11歳になるまでに祖父母、弟、父母を順に亡くし、

継母に育てられる。14歳頃から下手綱村(現茨城県高萩市)で医業の傍ら塾を開いていた鈴木玄淳の教えを受け、「松岡七友(松岡七賢人)」と交わる。

さらに水戸藩の儒者、名越南溪の門に入り、立原翠軒の父蘭溪とも交流した。51歳の時、安南国(ベトナム)に漂流した磯原の漁民を引き取りに長崎へ出向く。この時、中国人と漢詩のやり取りをして、周囲を驚かせている。

転機は52歳の時にやってきた。学問の功績が評価され、農民から水戸藩の郷士格(武士待遇)に認められたのである。

その後、京都と大阪に1年3カ月滞在し、儒学の大家・柴野栗山らと交流、学問の幅を広げている。61歳で水戸藩6代藩主、徳川治保の侍講(側近の先生)に抜擢された。

63歳の時、赤水の名を不動のものとした地図が誕生した。経緯線を記入した日本初の日本地図『改正日本輿地路程全図』である。様々な文献や情報をもとに作成。中でも天文学の

長久保 赤水 ————— Nagakubo Sekisui —————

知識を取り入れた点で画期的と云われている。

翌年の安永8年(1779)、大阪で出版された。この地図は伊能忠敬が作成した『大日本沿海輿地全図』ができる42年前のこと。忠敬の地図は、今でいえば「国家秘密」とされ、幕府の厳重な管理下にあった。このため一般に公開されたのは明治3年頃からと云われる。

その間、赤水の『改正日本輿地路程全図』は版を重ね、多くの人々に愛用された。寛政3年(1791)発行の第2版(長久保赤水顕彰会所蔵)の写しを見ると、凡例に「国名」、「郡名」などのほかに「城下」、「名所」、「古城古戦場」、「関所」などが記載されている。実用的な地図だった。

さらに近年の研究で同地図が出版されてから4年くらいの間に、当時の長崎オランダ商館長の手によりヨーロッパに渡っていたことが明らかになった。現在、フランスのパリ国立図書館に7点が大切に保管されているという。

赤水はこのほか、漢文の知識を活用して67歳の時に中国の地図『大清広輿図』を制作。2年後の天明5年(1785)には世界地図『改正地球万国全図』も手掛けている。

地図制作で偉大な足跡を残した赤水は、享和元年(1801)、85歳でこの世を去った。85年の生涯に関わる赤水関係資料のうち、実に693点が平成29年(2017)、茨城県有形文化財に指定された。(文中敬称略)

主な参考文献

『生涯学習の先人 長久保赤水』(平成8年、高萩市生涯学習推進本部・協議会編)。『マンガ 長久保赤水の生涯 付 長久保赤水海防意見 現代語訳』(平成29年、長久保赤水顕彰会発行)等。



東向きで設置されている長久保赤水の銅像
＝高萩市高萩(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「情報」のヒント